

白金萩

12月号



平成 27 年 12 月 発行

第 58 号

白金葭定例句会案内

月例句会報（'15／12／18 10名欠2）（鋤焼、冬夕焼）

一月十五日（金）12:00～15:00 ア第三・新年一般

一月十九日（金）12:00～15:00 コビアン・落の蔓、バレンタインの日

三月十八日（金）12:00～15:00 第三・御水取、鳥雲

新年一般の参考句（一月十五日分）

伊勢海老のびくんとたかが二千年

櫂未知子

詠進歌に牛や馬いて歌会始

金子兜太

子等が住む家それぞれを恵方とす

渡邊絵衣子

諸共に寿ぐ老の福茶かな

磯田みどり

つなぐ手を離しあ降り確かめる

こしのゆみこ

笑初して少年変声期に入りぬ

石川和子

ぬば玉の寝屋かいまみぬ嫁が君

芝不器男

読初めは荻生徂徠や致道館

古川京子

櫻や受け継ぐ父の鋸鉋

小原きよ

南座の餅花あかり旅三日

山尾かづひろ

三日はや生けるしるしのゴミを出す

谷山花猿

精神はぼっぺんは言うぞぼっぺん

阿部完市

蓬莱や東にひらく伊豆の海

水原秋櫻子

庭隅の幹に日のある一日かな

桂信子

「枯葉」ふつと口遊くちざきむカフェを出いでて

海神わたみの方へ傾かたぶき返り花

スカイツリーに灯が入る冬夕焼

すき鍋や大方子連れ好いた同志

さあ帰る鳥も帰る冬夕焼

磯田みどり

動かねば五体枯葉に埋まるなり

観覧車大円めぐる冬夕焼

いづれが黒きファーブル・サティの冬帽子

炭爆ぜる香や戦前の鋤焼は

妻を看みてわが頂点の冬日かと

増田陽一

光成高志

「Santa Claus is Coming to Town」
「サンタが街にやってくる」のBGMのカフェに座る

冬夕焼飛行機雲に及びをり

飯田孝三

岩垣の隙を覆ひて石蕗の花

蜜柑山初島小さく平なり

鋤焼や火事で死んだる牛を喰う

一枚の落葉をいちる象の鼻

すき焼のあと日本の歌うたふ

縄跳の中に入れたる寒落暉

冬の蠅禿頭にゐて身じろがず

制服の乙女が帰る冬夕焼

光
みち

大蛇の尾果てておごめく神遊び
とぐろ解く大蛇は男冬の汗
少年の正座して吹く神楽笛
紙・油大蛇匂へる神楽かな

松村幸一

吉羽多美子

短日の象は象舎へおのづから
短篇を読むやうな冬夕焼かな
すき焼の港神戸の夜景かな
測るたび血压大違ひ日短か
笑ひつつおどかす医者や十二月

武者昭七

冬夕焼背に負ひて坂下りけり

茶の花のこぼるる程の静寂しじまかな

からつ風の転がして行くレジ袋

インフルエンザの予防注射をためらひぬ

探梅や肩越し覗く枝の端

石州紙の大蛇がさりと寒に入る

倉田紀子

浅野正美

冬夕焼梢の中に星光る

今日という良き日ありけりすき焼す

夫と見し冬夕焼と筑波山

黄落の明るさ残る校庭かな

すき焼を母と二人の夕餉かな

馬匹車が冬夕焼の村に着

上京や冬青空の外務省

冬至風呂追だきかけて一人入る

初霜や登校児童の声バラバラ

蓮田中自分で引つぱる田舟かな

綿虫を掬ふ香煙受けし手に

すきやきのとろりとろりと葱甘し

冬夕焼牧水の歌碑読みをれば

只寒しここは主税の自刀跡

暮れ早し大歳時記をびしやと閉ず

田宮敦子

青木啓泰

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

4 短日の象は象舎へおのづから

4 冬夕焼ビルの間に黒い富士

4 蜜柑山初島小さく平なり

3 一枚の落葉をいぢる象の鼻

3 冬夕焼飛行機雲に及びをり

3 動かねば五体枯葉に埋まるなり

3 綿虫を掬ふ香煙受けし手に

3 冬至風呂追だきかけて一人入る

3 すき焼のあと日本の歌うたふ

2 冬夕焼背に負ひて坂下りけり

2 繩跳の中に入れたる寒落暉

みち

宏之助
昭七

〃

陽一

高志

敦子

みち

高志

みち

幸一

初霜や登校児童の声バラバラ

啓泰

正美

初霜や登校の児童声バラバラ
すき鍋や大方子連れ好いた同志

孝三

正美

Santa Claus is Comin' to Town
「サンタが街にやってくる」のBGMのカフェに座る

高志

正美

馬匹車が冬夕焼の村に着

啓泰

正美

冬に入る正座の膝に手を置きて

多美子

正美

冬に入る正座の膝に両手置き

多美子

正美

インフルエンザの予防注射をためらひぬ

昭七

正美

炭爆ぜる香や戦前の鋤焼は
紙・油大蛇匂へる神楽かな

陽一

正美

さあ帰る鳥も帰る冬夕焼

紀子

正美

煮立ちたるすき焼鍋の重さかな

孝三

正美

妻を看みてわが頂点の冬日かと
すき焼を母と二人の夕餉かな

敦子

正美

一句鑑賞

光成高志

冬夕焼ビルの間に黒い富士

敦子

夕焼けの西の空が真赤になり東の空まで染めつつある。電車の窓から黒い富士山がちらりと見えた。ビルの間に。行き行くとまたビルの間に見えた。その時の感動が尾を引いて心をあたためている。冬夕焼けの中の黒い富士山はやっぱり永遠な日本の風景である。

冬夕焼梢の中に星光る

正美

夕焼の空を見透かす枯木の梢の中に早一番星が光っている。宵の明星である。一日の終わりを告げる星。一番星が出たから帰ろうよとのメロディーが流れる町である。今月は金星は明け方に東に見える。今年の始めは日の入後西に見えたので、その頃の句であろう。

短篇を読むやうな冬夕焼かな

幸一

この句よくよく読むとなるほどそういうもんだなあと思う。敢えて理屈つけると、冬夕焼けの消えるまでに短篇は読めるしその中に起承転結があつて面白い。掌篇小説というのは短篇小説より更に短く、これでもいいかも知れない。

錦虫を掬ふ香煙受けし手に

宏之助

トドノネオオワタムシは体長は最大で4mm程度。日本では、北海道、東北地方を中心に、10月～12月頃空中を漂う姿が見られ、まるで雪が舞っている様に見えることから、雪虫の愛称で知られる。伊豆ではしろばんばと呼ばれる。私が初めて見たのは、宏之助さんに誘われて高幡不動の誓子句碑にお参りした時である。掲句は、毎月月命日にお参りされ清掃もされる宏之助さんの熱い思いが直伝わって直選。次の二句を想起。

錦虫のこの小娘を捕へ得ず（誓子）

大綿は手にとりやすしとれば死す（多佳子）

からつ風の転がして行くレジ袋

昭七

レジ袋とは、コンビニやスーパーなどで、購入した商品を入れるためにレジで渡されるポリ袋を指す。用済みになつたらゴミ袋としても便利だから、これがゴミ集積所に山積みされていたりする。空になつたレジ袋は風でも孕めばすぐ飛んで行くし、空つ風に転がっていくのはよく見かける風景。下町の路地や場末の飲み屋などの前で見かけた風景だと思う。生活するとはこういうこと、という作者の山川草木悉有仮性観が見えると思います。

一句鑑賞

武者昭七

石州紙の大蛇がさりと寒に入る とぐろ解く大蛇は男冬の汗

〃

紀子

一句目。石州紙は石見地方（島根県西部）で生産される和紙。腰が強く丈夫なので知られる。この地方にはヤマタノオロチ退治に材をとつた神楽が古くからあり「大蛇」とはそのこと。石州紙をはぎ合せて作った巨大なつくりもの。「がさり」はその重さ、大きさであり同時に寒に入った確かさをいう。一句目。神楽を終えて作り物から出てきたのはなんと大蛇を演じて大暴れしたイケメンの若者。さすがに汗が光る。季節外れの汗に演じきつた男の満足感が匂立つ。作者は幻想世界から立ち戻る。

海神わだつみの方へ枝張り返り花

孝三

「ワタ」は海、「ツ」は「の」、「ミ」は古代人が畏れた偉大な靈力。単に海の広がりをいうだけではなく水や雨や雲を支配する神靈をいう。作者は冬の岬に立つて遙かに海原に向つて枝差し交して咲く帰り花を見た。それを海神に供えられた幣とみたのである。作者は古い社家の血を引くひと。遠い昔、ワタツミの神に念じながら波の穂わけてこの列島にたどり着いたわれらの遠つ祖^{オヤ}たちにささげる鎮魂のうたでもあるう。

一枚の落葉をいぢる象の鼻

みち

団体の大きい象が足元に一枚だけ舞い込んできた落葉を所在無げに長い鼻の先でいじくりまわしている。象はさましいのである。遊びたいのに誰もいないのだ。相手するのは葉っぱだけ。ぼくらも少年の頃寂しい時はむやみになにかをいじくりまわしていたように思う。「いじくる」といつたところに象の孤独が見事にとらえられている。

短日の象は象舎へおのづから

幸一

短日は日暮れの早いこと。日暮れに象が象舎に戻るのは当たり前だけれど、「おのづから」と言われるとなんとも悲しい。大草原の華麗な落日から引きはがされそれが自分の宿命のように素直に冷たいコンクリートの部屋に帰つていく象。飼いならされてしまったものの悲哀

がリズムからも伝わってくる。動物園の夕方とどらえてみた。

一句鑑賞

増田陽一

幸一

短日の象は象舎へおのづから

3時になると、はや夕暮れの気分になるこの頃、獣たちも日暮れを敏感に察知して、飼育係に追われるまでもなく、屋根のある寝處に向うと言うのである。上野だつたら河馬、縞馬、オカピなども閉園近くになるとコンクリートの寝間に入ったのを見る事が出来て、近くから見るとこれらの動物の大きさに感心する。そして狭い独房での日暮の野生動物は短日の気分と共にとても孤独な感じがするものだ。長い年月、動物園に慣れた象の哀れさが感じられる句である。

一枚の落葉をいちる象の鼻

みち

これも象である。「いじる」に鼻の器用さが出ていて、人間なら「手慰み」と言うところであろう。やや寂れた冬の動物園。この象は鼻先で倦怠感をまぎらせて居るのであろう。

蜜柑山初島小さく平なり

高志

おのづから、「箱根路をわが越えければ伊豆の海や沖の小島に波のよるみゆ」と詠んだ源実朝の歌が浮ぶ。特に「蜜柑山」が好い。相模湾の紺碧に蜜柑の黄色が映え

て晴朗な景色、楽しい道行きのようである。

「枯葉」ふつと口遊むカフェを出で

孝三

イヴ・モンタンが歌うシャンソン「枯葉」の中に歌詞の朗読ではじめるのがあって、彼の渋い朗誦のフランス語が何とも粹で、歌以上に気分が出るのであつた。歌詞はジャック・プレヴェールであつたか。カフェを出て帽を傾け小声に「枯葉」を口ずさむ紳士。まさに孝三さんの自画像ではないでしょうか？

冬夕焼杖つく身にはみな優し

多美子

本当である。杖に縋つて哀れっぽく歩いていると時を感じる。冬夕焼の中では更にひとの温もりが身に沁みる。それにしても昨今、杖突いている人の多さよ。茶の花のこぼるる程の静寂かな

昭七

茶の花は白く小さく、散るにしても、近縁の山茶花が散るような派手さはない、つつましい花である。それが「こぼるる」という微妙な動きがあつて、なお静寂が深く感じられるのである。

冬夕焼ビルの間に黒い富士

敦子

東京の市中でも富士の見えるビルの間隙はあつて、絶景は何処だと話題にもなる。そんなどころに見た富士は鮮やかな冬夕焼のなかにあつた。逆光に見る「黒い」富士が印象的である。

いづれが黒きファーブル・サティの冬帽子

陽一

屠殺して、自分らよりずうつと団体のでかい動物を食べてしまう、老若男女談笑しながら。因業因業。ついいい余談、とまれ掲句とは全く別趣。

フロツクコートは、お馴じみの定版スタイル。昆虫とく

短日の象は象舎へおのづから

幸一

はからずも、共に象を詠む。(前句)「おのづから」が悠揚迫らぬ、巨象の振るまいをまざと眼前させて余すない。短日の慌たしさとの対照が醸す諧謔が面白い。

(後句)一枚の落葉という、木端にまつわる巨体の鼻先の仕種がいぢらしい。「いぢる」がお手柄、鼻先の器用さが目に染みる。囮われ者の所在なさだろうか。たまには、夕日のアフリカの大地を歩かせてやりたくもなる。兩句の視点は違うが、どちらも紛れなき象の姿である。

一枚の落葉をいぢる象の鼻

紀子

とぐろ解く大蛇は男冬の汗

「大蛇」三句の一、「別」の「石州紙の大蛇がさりと寒に入る」も、擬音「がさり」は紙の手触りそのもの、如実、寒入りの気と響き合う、が、絞るなら掲句。「とぐろ解く」が偉容、「大蛇は男」の断定が外連なく、豪氣、毫も位負けしない。一転、「冬の汗」の落着は臨場の真に迫り、なお艶あでに粋。はて「冬の汗」の主は、男それとも女性、その辺り読み手にお任せのも憎い。え、雌もどぐろ?いやそりや、あのお・・人間の・・。

冬夕焼飛行機雲に及びをり

高志

冬の夕焼けはすぐ消える。頭上を後方に飛び去る飛行機雲の尾が、しだいに、薄れ、広がりながら夕焼けに染まる。それを見上げ東の間の茜を惜しみつつ、立ち尽くすのである。末「をり」が贅、刻々の時の移りと広い空間をとりこみ、感興の深さが滲む。別に「鋤焼や火事で死んだる牛を喰う」、「鋤」焼は、その名の由来を辿るかに、諧謔を滲ませ、ほろ苦い。外連ない口誦は照れかくし、喰「う」は、敢えて当用の俗に依ったのだろう。繩文の話ではない、今のわれわれのこと。焼死はまだしも

冬至風呂追炊きかけて一人入る

啓泰

冬至風呂の当世模様、家庭篇ワンショットである。「追炊き」の斬新さが抜けている。この頃はボタンを押しだけなのも、そこはか籠る悲哀を深めて、おかしい。「かけて」が老練、内包をふくらませる、なるほど「かけて」では句にならない。ただ、「一人」「入る」は駄目押し気味、「追炊きをかけて一人の冬至風呂」などもあるだろうか。これはこれは、臆面もない妄言をお許しください。

冬夕焼枝つく身にはみな優し

多美子

冬空の夕焼けは束の間を輝き、厳しさを秘めて鮮やかだ。「みな優し」は、情韻交々、しみじみ身に染みる優しさである。「みな」は人々が皆ばかりではない、冬夕焼に映える乾坤あげて、一とき、わたしを、人々を優しく包んでくれるのだ。主情の辞の濫用は、俳句では「法度だが、ここ一番決まる」と見事。季題の一語「冬夕焼」がさまざと目に見せる、一服のカラーメイドである。

みち

ふつと目頭が熱くなる。「うた」は、誰も幼い頃から親しんだ、童謡、唱歌（はたまた歌曲などだろう）。焼肉は古く大陸渡来というが、「すき焼」はこれを純化した、みんなにつとに親しまれ、誰もが知る日本の料理。日本の心の歌になにげなく「すき焼」を配する、阿吽の妙にほとほと恐れ入る。野暮な託宣は止め、さあ「日

本のうた」を歌おう。用字の心配りも自づとゆき届く。はて、近頃、街に氾濫する歌はどここの「うた」なんだろう。

（出句一覽掲載順）

ハガキ句 58 報管見

飯田 孝三

音立てて銀杏の降る中にある

敏子

黄葉が日を浴びて散り敷く中、「音立てて」銀杏が降る。それを聞き、人は、ふとわれに返る。思い起こされる場面はそれぞれであれ、皆、重ね来たつた日々を思う。「音たてて」が鍵。印象的かつ象徴的である。「ゐる」の自然態がいい。そこに、人生の思ひ」が集約されている。因みに、「降る」は、類義の「散る」、「落ちる」が瞬間の動きを捉え、「下行」を印象づけるのに対し、ある空間を下に「移行」するさまを想像させる。時間と空間を孕む。「散る」、「落ちる」の“点”、“動”的イメージに比べ、“面”的、“時空懷抱”的観がある。してみれば、この場合、「散る」、「落ちる」ならぬ「降る」でなければならないのは明らかだ優れて映像的だが、掲句はもともと聴覚の句である。いわば立体的構造をもつ。句の懐深さの所以だろう。

北信濃空家の軒の柿簾

高志

晩秋、北信濃の固い空に柿簾のきらめきが響交う。柿簾が懸るのは空家の軒だ。その地の過疎の状景が眼前す

る。助詞「の」二字の外は漢字の名詞を並べた一本仕立が、「の」三音の調べと相まって、視線を結「柿簾」に収斂させ、加えて、K音を畳む、一句の韻きが北信濃の風土に通い、一段と、あたりの荒廃ぶりを印象づける。言わず見せる即物、硬質の迫力を見る。一方、その裏側にある思いが見えてくる。

ハガキ句 58報 ('10 / 11 / 4)

盆燈籠畦にともして千枚田
老の手はすべり易くて桃李
蠟螂ノタクト百蟲コンチエルト
聖路加の鐘の抑揚青嵐

鈍き刃のつきあたりたる柿の種
身に入むやとき人に犬を愛す
冬瓜の並ぶやネットショッピング
流木の逆さに懸り草の花

羊三 孝三 瑞子 かづひろ
敏子 彰一 高志 ハ ハ ハ

電話の中に、相手の電話が鳴るのを聞いて、秋の深まりを今更に感じる。身辺を詠んで、易しく、深い。「秋深し」が寸も動かない。ただ、同時に、それが主情の季語たる制約をうけ、前々句「音立てて」に一步譲る気がする。

流木の逆さに懸り草の花

前々句「北信濃」と同じく、同地で囁き目した荒廃の一景だろうか。「草の花」が印象的である。

「柿の種」につき当たつたのが、銳からぬ「鉗き刃」

である。尤も、鋭き刃では句にならない。鉗く太けれど、刃は小さき柿の種をとらえ、敏を失わぬ。かつ、動じない。身辺の些細に感じつつも、それに惑わされぬ意志の謂いだらうか。柿の種は小さいが固い。「鉗き刃」がふさわしいのかも知れない。そんな受け止めもできるだろうか。示唆に富てだ一句である。

身に入むやとき人に犬を愛す

人は人を愛する、愛さずにはいられない。けれども、犬が無性に愛しくなるときがある。眞実、「身に入む」や、「ときに」が臍。

聖路加の鐘の抑揚青嵐

かづひろ

秋深し電話の中に時計鳴る

敏子

「聖路加」を称するものに、寡聞、著名な病院の外は知らない。内、または、まわりにチヤペルがあるので

うか？ 青嵐が鐘の音をあおる。立姿の決まる一句である。「抑揚」の漢字成句をほぐすと、また別の風合が加わるだろう。

冬瓜の並ぶやネットショッピング

彰一

ネットショッピングの賑わいが伝えられる。何でも買えるようだ。その手軽さと「冬瓜」の存在感が対照し、面白い。ただ、冬瓜はネットショッピング案内誌上のそれだろうか。その点、感興が少々殺がれる。

盆燈籠畦にともして千枚田

羊三

情景が目の当たり。昔、田舎で眼にした、廣々とした青田に盆燈籠のともる風景を思い出した。ただ、「盆燈籠」が人事、「ともして」も人為。一考の余地があるだろうか。

(平22・11・11)

お便り広場（到着順、敬称略）

白金葭十一号頂きました。璃子さんが潰刺としていましたね。大分喜んでいました。私は来年の俳人協会のカレンダーを頂きました。来年の出版迄は今迄どおり送金しますから出版の目途がたつた時、温泉旅行でも行つてゆつくり休んでください。特にみちさんにラクをさせてあげて下さい。不足しましたらご連絡下さい。益々のご活躍を祈ります。

(11・30 小山陽也)

玉誌「白金葭」57号を有難く拝受御礼申上げます。買

主を社長呼ばはり大熊手（光みち）約十年も昔の浅草の酉の市に案内してくれた美女市川泰子さんの笑顔まで想い出して胸が熱くなります。勝手口泥つき大根届ける（浅野正美）早起きしてポストに新聞をとりに出てみると門の鋳物の門の扉の下に大きな泥つき大根一本近所の農家の山木明子さんからのプレゼント、白菜の時は安藤弥子さん、笠地蔵のおはなしを連想。感謝！ 皆様尚ご健筆を祈念しております。草々

(12/1 河村博旨)

定まらぬ日が続いておりますが、お忙しくお元気にな活躍と存じ上ります。白金葭十一月号拝受より日が過ぎ失礼いたしました。このところ、思い立つて畳屋さんに入つてもらつたりのついでに片付けに手を染めましたらかえつて散らかり自分で墓穴を掘つてしましました。そんな訳で楽しみは後にと多彩な中味の白金葭を熟読できずおります。一人で何もかも決めて実行はタイヘンです。御身おいとい下さいませ。裏第22回日展 おや？

名坂賀永子の猫の絵 (12・3 長屋璃子)

白金葭十一月号受け取りました。大勢の句会の友がつて楽しく忙しく生きていることが目に浮びます。私ごときがのせる句もできそうにない。最終ページの飯田孝三さんの文章（姉のこと）には心うたれるものがありました。ありがとう。あとは私が作った新米（ヒノヒカリ）

少しですが送ります。何もお気遣いなく食べて下さい。

高齢になつて米作りも限界と思つています。敏子さん体に気をつけてあまり無理しないこと。皆さん心も体も元気で新年を迎えましよう。（今朝くすり飲んだ飲まぬと自問する）（にくいやつ玉ねぎ植えたよとう虫）年のせいか字が上手く書けない。漢字が思い出せない。まあいか。高志敏子さんへ

（12／3 健三）

（ヨトウムシの句同感）私は無農薬栽培で菜園を営んでいますが、一番困るのが虫害です。キヤベツなどはほつて置いて青虫さんに上げます。そのうちキヤベツの方が勝つて巻きます。根切り虫ヨトウムシは強い。掘り出して取り除いています。俳句は文芸の一つですので、表現法など芸が要ることもありますが、生活の中であれ！とか気づいたことをメモしておくだけでいいと思います。

又人様の句を読むだけでも充分活動できます。年とると物覚えが悪くなりますが、人がよく見えたり、若いとき分らなかつたことが分つたりいいことも沢山あります。高志）

師走も半ばとなり、やつと東京クラブも本年最後の句会を楽しむことができました。何かと応援して下さいました。来る年もよろしくお願ひ申しあげます。白金葭には啓発されること多く、毎月ありがたく拝読しておりますが、このところ忙しくじっくり楽しむ間もなく、お正月は少しゆつくりできる折に熟読玩味いたす所存でございます。様々のことだいぐ感謝

御礼申し上げます。

（12・4 璃子）

（お礼）先日はお世話になりました。たいへん楽しい句会でした。月例に加え、特集号の準備等々、えらくご面倒をおかけします。せいぜい確りした稿をお届けしたいと思います。なにとぞよろしくお願ひいたします。いたいた生姜を早速調理に活かして、妻も喜んでいます。今年は思わぬ苦労もありましたが、あつという間の一年でした。病より転びが怖い、お互に気をつけ、いい新年を迎えましょう。来年もなにとぞよろしくお願ひ申しあげます。草々

受贈誌（H27年12月号）

（平成27・12・20 飯田孝三）

彩雲となる初富士の雪煙（彩126号）

平野ひろし

鰯木の切口燐と初日出づ（リ）

（リ）

神苑にモノローウオーケ初鳴（リ）

（リ）

初詣富士湧水のあたたかし（リ）

（リ）

初日影瑠璃きらめける鳩の頸（リ）

（リ）

冬籠廁通いを日に十度（リ）

（リ）

冬籠老人乾き易きかな（リ）

（リ）

台風の眼の中卵かけごはん（飛行雲77号）

駿河岳水

火祭や高齢行者仁王立ち（あすか土日号）

山尾かづひろ

（リ）

（リ）

吹き溜る回転ドアの落葉かな(東京クラブ 12月) 理佳江

暮早しままごとほどの米を研ぐ (リ) "

ぬけ道の修道院に冬の蝶 (リ) "

年の瀬や六区にじよんがら急調子 (リ) "

いつしかに蜜柑大小 L Mと (リ) "

二だま

芋嵐墓地を求めて西東 (彩 126号) 光成高志

鉢のままほづき市より荷が届く (飛行雲 77号) 青木啓泰

俳窓評論

「俳枕 江戸から東京へ」の (254 257) 現代俳句協会のブログを山尾かづひろさんから頂いた。毎月いただくブログの印刷紙である。このブログは2010年 (H 22) から始まっているからほぼ本誌と年はおなじである。冊数は今月十三日で258と大変な数である。金子兜太、宇多喜代子会長と繋いで今は誰か存じ上げないが、かづひろさんの所属結社は野木桃花さんのおすかであり、H21年には稻作の歳時記をまとまられた。本誌ではこれを見本に兼題句をまとめようとしている。それはさておき、江戸から東京への吟行句は壮大だ。私の芭蕉の軽み以後と同じだと思う。どうか続けてください。宇多喜代子さんの里山歳時記は消え行く季語の鎮魂になるのか、この気

持に同感です。258報より

枯葉積む堆肥の箱や山の畑 金子きよ

竹炭の炭焼小屋を覗きをり のぞき見る炭焼の小屋ドラム缶 緑川みどり

万世遊 璃子 武子

恋の歌を読む その九 武者昭七

つれづれと空ぞ見らる思ふひと天下りこむものならなくに 和泉式部

「つれづれ」は、じつと思いをこらすさま、つくづくの意(岩波古語辞典)。「るる」は、自発の助動詞。そうしようとここに決めたわけでもないのに自然とそうな

つてしまふさま。「思ふひと」は恋人。空を見ていたからと言つてあのひとが空からやつてくるわけではないのにわたしはついほんやりと空を眺めてしまう。まるで

空からあのひとがやつてくるみたいに、というのです。「つれづれ」は手持無沙汰なさまをいうのですがここには王朝女性の性的な倦怠感がこもっています。恋人に会

いたくてこころは燃えて、いるのに会えずに体を持て余して、いる感じです。ぼくらはなにかにつけて結果をもとめがちです。特に現代はそれを求められるようです。「即戦力」なんて嫌なことばがとびかっています。しかし、結果がむなしいと知りながらそうせずにはいられないという心情もあります。このうたはそんな非合理な心情

を嘆き、あるいはいとおしいでいるうだとおもいます。
（「つれづれ」は兼好法師の「徒然草」の冒頭の言葉としてよく
知られていますが、大野晋さんの古典基礎辞典によれば、「これ
以上続いてほしくないと思う状態が単調に続いて、そこから脱却
したい、変化したいと思つてもできず、所在なく、心が晴れない
さま」とあります。それが近世では「つくづく」の意味に使われ
たといいます。）

芭蕉の軽み以後 (45)

光成高志

延宝七年に刊行された池西言水の「江戸蛇之鮒」に入
集された句の内一句。この句集発句三二九、作者一五六
人に及ぶ。

和蘭陀も花に来にけり馬に鞍

桃青

江戸は花満開、この花を見にオランダの使者も遠路長
崎から馬に乗つてやつて來た。この年の蘭人の江戸参府
は三月一、五の両日江戸城に登城、騎馬によるしきたり
の通り馬に鞍をつけた花見に來たわい。謡曲鞍馬天狗に
「花咲かば、告げんと言ひし山里の、告げんと言ひし
山里乃、使は來たり馬まに鞍。鞍馬の山乃雲珠櫻うづざくら
る。手折たおり枝折おりしおりをしるべにて、奥も迷はじ咲き續く。
木蔭に並み居ていざいざ、花を眺めん」の前の詞章をも
じつて使つた。もう一つは
草履の尻折りて帰らん山桜 (雨降りければ)

桃青

草履の尻を折り、ついでに山桜も折つてさあさあ帰ろ
う。千載集に「一枝は折りて帰らん山桜・」がある。
この詞のもじり。「折りて」を草履の尻と山桜の両方へ
掛け、着物の尻端折りばしよりの意味も掛けている滑稽。
言水は前年「江戸新道」を編んでいる。発句二一五、作
者一〇七人。なんと俳諧師の多忙なことか。桃青もその
中にいたのだ。この年の秋には似春、四友両名の上方旅
行に際し、四友邸で送留別三吟百韻一巻を興行。
見渡せば詠ながむれば見れば須磨の秋

桃青

見渡しても眺めてみても、見れば見るほど須磨の秋は
あわれ深いことだろう。明らかに源氏物語の心づくしの
秋風を踏まえている。四友の付句は

桂の帆ばしら十分の月

四友

盃に文を飛ばす雁鳴いて

似春

まるで光源氏が須磨の海にせり出す渡殿で月の宴を
張つてゐる場面を自らに引き付けてゐるようだ。更に前
書をつけて

「土屋四友子を送りて鎌倉までまかるとて」

桃青

霜を踏んでちんば引くまで送りけり

「ちんば」は禁句だなんて江戸時代は言わない。浅野
源左衛門の瘦馬よろしく、跛あらわをひくほど遠くまで來
たことよ。これも謡曲「鉢の木」の佐野源左衛門の瘦馬

を連想させた滑稽。ちんばは瘦馬からの連想である。遠くまで足をぴょこたんぴょこたんしながら送りに来た。

惜別の情が籠るではないか。

年末には才丸撰の「坂東太郎」が刊行され、桃青の發

句も入集される。

今朝の雪根深を園の枝折哉

雪に覆われた銀世界の朝、わずかに頭を出す葱の緑が、

菜園の目印、枝折になつてゐる。卑近な葱を枝折に見立

てたところが俳諧なのだ。

こうして延宝七年が暮れる。廻りも、桃青自身も俳諧

師として目のまわるような多忙の中にいたことがわかる。

身内を養う生活もあつたのだから尚更だ。

桃青

我孫子日記

11/20	例会
11/29	観劇
*	12/4
*2	蜜柑狩
12/6	金子兜太 講演会
12/11	出版社と 顔合わせ
12/18	例会

*名にし負ふ皇帝ダリヤ上を向け
*2 蜜柑の蒂乾きて白い花の如
河口淵魚跳ね鶴と百合鷗
木の株のありて蜜柑を剥いてをり

みち ハ ハ 高志

蜜柑より海を讃える蜜柑狩

編集後記

孝三さんのお便りの通り今年もあつと言う間に年末となりました。来年は夏の事を忘れず益々安んぜず、せつかちにならぬようにと思つております。五周年記念号の原稿を待つてゐます。どうかもう一回、選句して一月中にはお示しください。昭七さんからは全て稿を頂きました。次の十周年記念号を二里塚として目指したいと思つております。それまで皆様と共に健康で迎えられるよう祈つてやみません。来年はきっといい年になります。確信しています。よいお年を！

白金葭	第 58 号
編集・发行人	平成 27 年 12 月
発行所	(Tel & Fax)
表紙の題字	光成高志
.. 加納綾女	270-1119
写真	我孫子市南新木2
月	Fax月
12	12
22	04
日	発行
の白金葭	14
	7187
	17
	1068